別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　苅谷康太

本論文「アラビア語著作から見る西アフリカ・イスラームの宗教的・知的連関網 —— アフマド・バンバに至る水脈を中心に」は，その標題に示されている通り，西アフリカのアラビア語写本・刊本の分析を礎に，同地域のイスラーム宗教知識人たちのあいだに張り巡らされていた壮大な知の伝達経路を復元し，その伝達の動態を素描しようとする試みである。そのさいの中心人物として選ばれたのが，今日のセネガルなどで強大な勢力を保持している神秘主義教団（ムリッド教団）の開祖アフマド・バンバ（1853 年頃-1927 年）である。そして，バンバの思想形成に寄与した数世代前までの知識人たちの事績をも視野に収めながら，彼ら自身の著作や伝記といったアラビア語散文および韻文の一次史料を精密に読解し，彼らの周辺に築かれていた直接的関係（面会や書簡による教義や情報の伝達過程）ならびに間接的関係（著作の学習や引用，注釈書の執筆，散文著作の韻文化などの営み）を辿ってゆく。従って，本論文で扱われる時間的・空間的な射程は，狭義には神秘主義教団が拡大・定着を始める 18 世紀前半から，バンバが歿する 20 世紀初頭までの約 200 年間の西アフリカであるが，広義にはその背後に広がる北アフリカ（マグリブ）やエジプト・シリア・イラク（マシュリク）の，イスラーム勃興以来の広大な領域と時代に属する知識人たちのアラビア語著作が含まれることになる。

全体は「序」と「結語」を挟む形の二部構成を取る。第 1 部「西アフリカ・イスラームの教団的枠組みに関する情報の整理と蓄積」全三章では，バンバに先立つ世代の三知識人の人物史がそれぞれの章において描写される。その三人とはすなわち，西アフリカにおけるカーディリー教団中興の祖スィーディー・アル= ムフタール・アル= クンティー（1811 年歿），ティジャーニー教団の教えを西アフリカに初めてもたらしたムハンマド・アル= ハーフィズ（1830-32 年頃歿），そして独自の教義によって教団の枠組みそのものを変革・超越しようとしたムハンマド・アル= ファーディル（1869 年歿）である。

ここでは，各人物の血統や，神秘主義の教義の接受における師弟関係を示す道統，そしてより一般的な学問的系譜などが検討される。とくにクンティーとハーフィズについては，それぞれが学んだ先人の著作が学問分野別の一覧表の形で提示され，彼らが宗派や教団，地域の枠組みに捉われない膨大な領域の学問的伝統を受容していたことが指摘される。また，並存する諸教団が，神の許に至る一本の道である点において本質的差異を持たないという考え方から出発して，ハーフィズが複数教団の並存を容認する思想を展開し，ファーディルが教団間の差異自体を否定する「教団単一論」を主張したことも紹介される。これらの思想と，バンバの思想との親和性は第 2 部で改めて検討されることになる。

第 2 部「西アフリカ・イスラームの宗教的・知的連関網」全三章は，第 1 部の内容を受ける形で，主人公アフマド・バンバに即した知の連関の様相を具体的に描写する。第 1 章「アフマド・バンバの若年期」では，バンバの生涯を辿りながら，彼が若年期に渉猟した著作や彼自身が著わした作品の一覧表が提示され，第 1 部の三名と同様，バンバも時間・空間，あるいは教団の垣根を越えた広範な著作を吸収していたことが明らかにされる。第 2 章「西アフリカの宗教的・知的連関網：直接的関係」では，これまでの議論を要約する形で，クンティー，ハーフィズ，ファー

ディルの三者とバンバとを中心とした人物相互の相関関係が概略図によって提示される。第3章「西アフリカの宗教的・知的連関網：間接的関係」は，バンバが読んだ著作の一覧表を出発点とし，それらを西アフリカ以外の地域（マシュリクおよびマグリブ）に由来する著作群と，西アフリカ内部の著作群とに二大別した上で，彼に流れ込んだイスラームの知の伝統を具体的に跡づけてゆく。とくに，イスラーム法学と神秘主義とを融合した「知識」の重要性と，そうした「知識」の「行為」に対する優越を説くバンバの著作中の文言が，マシュリク出身の大思想家ガザーリー（1111年歿）に淵源を持ち，マグリブ出身のシャーズィリー教団のアフマド・ザッルーク（1493年歿）や，西アフリカ出身の碩学ヤダーリー（1752/3年歿）の著作を媒介としてバンバへと順次伝承されてゆく連鎖の過程を追った一節は，本論文全体の圧巻と称すべき部分である。その分析を通じ，今日一般にバンバに帰せられる「労働の教義」，すなわち働くことが祈りに通ずるといった思想が根拠のないものであることも明らかにされる。他方，バンバがハーフィズやファーディルに近い，複数教団の並存を積極的に認める思想を展開してゆくさいには，クンティーの著作の文言の意図的な読み替えがなされていることも示される。

最後の「結語」では今後の展望が述べられ，さらに「補遺」においては，バンバの創始したムリッド教団で用いられているウィルド，すなわち教団独自のアラビア語の祈禱句が，註釈付きで翻訳・紹介されている。

こうした構成を持つ本論文の貢献としては，何よりもまず，従来の「黒いイスラーム」論に対し，アラビア語一次史料に基づく根柢からの問い直しを行なった点が挙げられる。「黒いイスラーム」論とは，アラビア半島を中心とする「正統的」なイスラームに比べると，西アフリカの黒人社会で受容されたのは「歪んだ」イスラームであるとする，植民地時代以来人口に膾炙してきた見解である。これに対し本論文では，西アフリカのイスラーム知識人たちが，マシュリクやマグリブの知識人たちとの密接な連関網のなかで知的体系を構築していた事実を明らかにし，この地域のイスラームの特殊性を過度に強調する視点に是正を求めている。また，教団の枠組みを最重要視する従来の西アフリカ・イスラーム研究に対しても，その枠組みの基層部分に通底する，開放的・流動的な知の連関網の存在を示唆することで見直しを要請している。

第二の貢献は，もっぱら植民地行政当局の公文書に依拠したり，文化人類学的参与観察に基づいたりする手法が一般的であった西アフリカのイスラーム研究において，アラビア語一次史料の存在とその重要性とを初めて認識させた点であろう。本論文では，苅谷氏が膨大な時間をかけ，不屈の忍耐力を発揮して蒐集した現地の図書館・文書館所蔵の写本資料や，書店で購入した刊本資料の緻密な読解の成果が遺憾なく生かされている。韻文と散文とを問わず，論文中で引用されるアラビア語の一次史料には，すべてローマ字転写と日本語訳が付され，筆者の訓みが提示される。また，一般に馴染みのない西アフリカの著述家とその著作に，解説や解題が付されていることは言うまでもない。こうして整理・蓄積された基礎的情報自体が，文字資料に基づく今後の実証的な西アフリカ研究の出発点となるはずである。

第三の貢献は，ムリッド教団のいわゆる「労働の教義」がバンバ自身の著作には見出されず，むしろ後世の人々の意図的読み替えによって作り出された教説であることを明らかにした点である。これは従来なされていなかったまったく新しい指摘であり，この部分だけでも独立した論考の形で，世界の学界に向けて発表する価値があるとの評価が多くの審査員から与えられた。

勿論，高い完成度を示す本論文にも，問題点がないわけではない。例えば，分析の対象を「アラビア語著作」に限定したため，西アフリカに存在するさまざまな「現地語」，とくにバンバの母語であるウォロフ語を媒介とした知の伝達経路への目配りが手薄になっている印象を読者に与え

かねない。また，純粋な知の連関を辿るという論文の性格上，それらの知を生み出す母胎となった激動期西アフリカの政治的・社会的状況，とくにイスラームの精神世界と政治権力との矛盾に満ちた関係への言及が十分にはなされていない憾みがある。さらに，西アフリカ研究における教団的枠組みの相対化を提唱する場合には，すでに植民地時代に同様の指摘を行なった人類学者も存在していた事実を踏まえる必要があるとの指摘や，そうした社会的柔軟性の由来に関するさらに深い考察があればよいとの要望も出された。

しかし，これらの多くは本論文が設定する枠組みをはみ出した，今後の課題とも言うべき指摘であり，研究自体の劃期的な価値を減じるものではない。よって審査委員会は，本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。